

【展示紹介】

市立函館博物館令和6年度企画展 「北東アジアのシルクロード—北方交易と蝦夷錦—」

大矢 京右

1. 展覧会の概要

蝦夷錦とは、中国の明・清朝等において制作され、アムール川流域やサハリンの先住民の手を経て日本にもたらされた絹製の官服と、それらを加工した製品等の通称である。市立函館博物館では、1879年に函館の商人杉浦嘉七から寄贈された2領に代表される蝦夷錦6点を所蔵しているが、その所蔵資料をはじめとする北海道南西部と青森県に残された蝦夷錦と、これらがもたらされる大きな原動力となった北方先住民交易「サンタン交易」について紹介する企画展「北東アジアのシルクロード—北方交易と蝦夷錦—」（以下「本展」とする。）をこのほど開催した。本テーマについては、2022年に函館市北方民族資料館で開催された企画展示「北のシルクロードと蝦夷錦」展¹⁾においてすでに紹介されていたが、このときは「常設展の展示替えの際に展示の構成を変更することによって実施し」（中村 2023 : 86）、「常設展示に割り込むような形になっており、規模には制限が」（中村 2023 : 86）あったことから、あらためて市立函館博物館の企画展として規模の拡大と内容の充実を図り開催したものである。

2024年7月2日から10月13日までの104日間（うち実開館日数84日間）にわたって開催された本展には5,417人（有料・無料合計）が来場したが、これは市立函館博物館の「ドル箱」施設であった市立函館博物館分館が2007年に閉館して以降開催された特別展・企画展のなかでは、2019年に開催された企画展「箱館戦争終結150」（6,791人入館）に次ぐ来場者数となった。

本展は2022年の「北のシルクロードと蝦夷錦」展同様、函館大学の中村和之教授（日本学術振興会科学研究費基礎研究(B)「サハリンアイヌの交易と文化変容、その学際的研究」（20H01306）研究代表者）による全面的な協力のもと企画され、北海道松前町教育委員会や青森県佐井村教育委員会等、多数の機関からの出品協力により成立している。またこれら展示に直接かかわる事柄のほか、関連シンポジウムへの登壇や周知・広報に係る地元紙掲載コラムの執筆等、多数の研究者からの惜しみない協力があったことも、本展の成功を語るうえで欠かすことはできない。



図1. 「北東アジアのシルクロード—北方交易と蝦夷錦—」イメージポスター

2. 展覧会の構成

2-1. 北海道南西部・青森県に残る蝦夷錦



図2. 1879年に杉浦嘉七が開拓使函館仮博物館に寄贈した蝦夷錦（市立函館博物館所蔵）

本展はおおむね5つのテーマで構成し、第1コーナーでは朝服や蟒袍、そしてそれらを加工した打敷や袷裳等の蝦夷錦を展示した。ここでは市立函館博物館が所蔵する蝦夷錦とともに、本展開催初日から8月25日までは松前町や江差町、上ノ国町や乙部町といった北海道南西部に残された蝦夷錦を展示し、8月29日から本展最終日までは青森県佐井村に残された蝦夷錦に展示替えして観覧に供した。また放射性炭素年代測定によって得られた、これら蝦夷錦の制作年代についての解説パネルも展示し、最新の蝦夷錦研究の一端を紹介した。

2-2. 中国の周辺諸民族政策 朝貢交易と蝦夷錦

第2コーナーでは、第1コーナーで展示した蝦夷錦が明・清朝による先住民族政策に基づく朝貢交易によってナーナイやウリチといったアムール川流域の先住民族の手にもたらされ、そこからサンタン交易と呼ばれる北方先住民族交易によりサハリンアイヌや北海道アイヌの手に渡っていったことを、主に函館市中央図書館所蔵の文書資料や古地図等により紹介した。特にアムール川流域の満州仮府で交易の様子を見聞きした幕吏間宮林蔵については、その報告である「東韃地方紀行」とともに、間宮が現地でも遠目に確認したとされる「勅修奴児干永寧寺記」と「重建永寧寺記」の拓本を展示することによりその足跡を紹介した。

2-3. 「鎖国」下の第四の窓口、松前

第3コーナーでは、サンタン交易により北海道にまで至った蝦夷錦が松前藩を窓口として近世日本社会に受容され、「松前渡」として江戸や京都などの本州各地にまでもたらされていたことについて紹介した。本コーナーは展示資料自体は多くないが、サンタン交易と近世日本社会の交差点という本展のなかでも重要な位置づけとなることから、徳川家康が蝦夷錦を所望したエピソードが書かれた「新羅記録」や、往時の松前の華やかな様子が描かれた大型資料「松前屏風」（複製）等を効果的に配置し、観覧者の印象に残るように展示を構成した。

2-4. 絵画のなかの蝦夷錦

第4コーナーでは、新井白石による「蝦夷志」（写本）や小玉貞良による「蝦夷絵」、村上島之丞による「蝦夷島奇観」等の蝦夷錦が描かれた絵画資料を展示し、近世日本社会に受容された蝦夷錦がいわゆる「蝦夷」「蝦夷地」のイメージを体現する存在となってい

ったことについて紹介した。蝦夷錦が描かれた絵画資料の中でも特に著名な、蠣崎波響による「夷酋列像」および「夷酋列像粉本」等の展示においては、蝦夷錦を着用したアイヌのリーダー「御味方蝦夷」の姿を描いた本資料が、1789年に起きたクナシリ・メナシの戦いの失態を取り返すための政治的な意図のもとで制作された可能性についても言及した。

2-5. 交易品としての青玉

第5コーナーでは、先住民族から蝦夷錦とともに交易品として珍重された、青玉—ガラス玉—を用いた装飾品や生活用具等を展示した。特にアイヌの首飾り—タマサイ—については、関根ほか2023による編年試案に基づき、所蔵する18点のタマサイを制作年代順に並べてタマサイの編年を解説するパネルとともに展示することにより、観覧者がタマサイの変遷について視覚的に認識できるように配慮した。



図3. 展覧会会場の様子

3. 関連事業等

本展においては関連事業として、担当学芸員による「展示解説セミナー」（2回）とシンポジウム「北方先住民族の交易と産物」を開催するとともに、会期中に「視点！論点！北東アジアのシルクロード」と題した8回のコラムを函館新聞紙上に連載した。

展示解説セミナーは、学芸員が会場で観覧者を案内しながら展示解説するものであり、会期中2回の開催で合計44人が参加した。特に2回目の開催では学芸員による解説の後、アムール川河口付近で間宮林蔵の足跡を実際に踏査した経験を持つノンフィクション作家の相原秀起氏が、調査当時の様子をパワーポイントや動画等を交えながら30人の参加者を前に解説した。

シンポジウム「北方先住民族の交易と産物」は8月17日、函館市中央図書館視聴覚ホールを会場に、国立アイヌ民族博物館との共催で開催され、68名の参加者が来場した。シンポジウムでは国立アイヌ民族博物館佐々木史郎館長による基調講演「蝦夷錦を着た人たち—北方諸民族の間に残された絹織物—」、弘前大学瀧本壽史特任教授による研究報告「本州における蝦夷錦認識とその特徴—道南との比較から—」、相原秀起氏による調査報告「間宮林蔵が見た蝦夷錦の道—アムール川と海峽部に残るもの—」が発表され、講演後には国立アイヌ民族博物館田村将人氏をコーディネーターとして登壇者によるパ



図4. シンポジウム「北方先住民族の交易と産物」

ネルディスカッションも行った。

コラム「視点！論点！北東アジアのシルクロード」は、本展会期中の隔週金曜日に函館新聞紙上において連載し、本展を監修した中村和之教授による「蝦夷錦とアイヌの北方交易」や瀧本壽史特任教授による「津軽海峡を渡った蝦夷錦—本州アイヌとの関りから—」、弘前大学関根達人教授による「アイヌの首飾りタマサイの年代を推定する」など、北方民族研究の第一人者が本展の内容にかかわる様々な知見を一般の読者にもわかりやすく執筆した。本展来場者のなかには、本コラムを読んで本展に興味を持ち来場した人も少なからず見受けられた。

これら関連事業の実施においては、冒頭でも触れた通り多数の研究者がほとんど見返りのない中で協力してくれており、これは本展が市立函館博物館の近年開催した展覧会のなかでも特に多くの集客があったことの大きな要因の一つとなっていると考える。

なお2025年3月15日からは国立アイヌ民族博物館においても蝦夷錦と北方交易をテーマとした展覧会「ウイマムレブンカーサンタン交易と蝦夷錦—」が開催されており、蝦夷錦を切り口とした北方先住民族研究の今後さらなる進展が期待される。

謝辞

本展および関連事業等の開催にあたり、企画と監修に多大なるご協力をいただいた中村和之教授をはじめ、ご協力いただいた機関および研究者の皆様に心より感謝申し上げます。

注

- 1 本企画展示については中村2023において概要が報告されているほか、奥野2023において開催の経緯や配布物（リーフレット）の内容等が紹介されている。

引用文献

奥野進

- 2023 「学術調査と連携した博物館活動の展開—地域博物館での成果還元型事業の一例—」
『市立函館博物館研究紀要』33: 43-56.

市立函館博物館編

- 2024 『令和6年度市立函館博物館企画展図録 北東アジアのシルクロード—北方交易と蝦夷錦—』市立函館博物館、函館市.

関根達人、中村和之、三宅俊彦、奥野進

- 2023 「銭を指標とした伝世タマサイの編年試案」『市立函館博物館研究紀要』33: 1-42.

中村和之

- 2023 「函館市北方民族資料館 企画展示「北のシルクロードと蝦夷錦—炭素14年代測定で明らかされた蝦夷錦の製作年代—」」『北海道民族学』19:86-89.

(おおや・きょうすけ／市立函館博物館)